

# ドイツにおける難民襲撃事件と青年問題・ 現地からの報告

ロストック：1992年8月，暴力の拡大・原因・結果

カール・ハインツ・ヤーンケ    インゴ・コッホ  
マンフレッド・ヴェント        大串隆吉訳・解説

## はじめに

この数週間、数カ月間に外国人敵視、人種主義そして右翼過激主義のテーマにたいし多くのことが書かれ、ドキュメントタリーが放映され、多数のテレビ討論はこのテーマをとりあげ、名士、政治家、科学者、芸術家が立場を明らかにする機会を持った。しかし、様々なかたちですべてはそんなに悪くはないと言う「国民の声」をしばしば聞かされている。なぜならメディアはお金を約束するいつも新たな刺激的見出しのためだけに題目を必要とするからである。

たしかに、すべての報道は実際の経過を細かく追わなかったし、ことに二、三の問題は避けられたし、避けられている。しかし、結果をみれば人種主義が、暴力志向と暴力行為と対になってドイツ連邦共和国の社会で驚くべき規模で広がったこと、そしてネオ・ナチ的要素は一層増加している攻撃性——とくに外国人、また異なった意見の持ち主と障害者に対する——のある意味で先駆者であるという事実がある。見逃す事の出来ないのは、社会の中にある意識下の潜在的な人種主義である。

一般的に東ドイツにおける状況とドイツ民主共和国の状態の下の特異な青少年の成長の条件が、この傾向の原因として引き合いに出される。青年——しばしばそう言われる——は、「命令された反ファシズム」によって民主主義的、反ファシズム的思考の真の人道主義的価値を閉ざされたままであったと言われる。確かにここに原因があるかもしれないが、ただここにだけではない。ま

さに自己同一性、多くの当たり前となっていた余暇の機会と就業機会そして将来の見通しの破壊が重要な役割を果たしている。ファシズムの歴史について、人種主義、外国人敵視そして反ユダヤ主義の原因と作用のからくりについて知識が欠如しているのも、重要である。多くの問いがこれに関連して投げかけられている。

このパンフレットには、歴史的青年研究により問題を熟知している、「青年史・青年研究会。著述と斡旋e. V」の三人の会員が書いている。彼らは問いをたて、1992年8月のロストックの事件と全般的な外国人敵視と人種主義の原因と背景の答を探している。

同時に、このパンフレットの論文で現実の問題が熟考されているはずである。著者たちには部分的に意見の対立がある。彼らは問題の複雑さを自覚しているので（意見の一致を完全に求めず）、外国人敵視、人種主義とネオ・ファシズムとの対決のためにこれを提供するだけにする。「青年史・青年研究会」は自らの義務として歴史的広がりをもってこれを考察する。

インゴ・コッホ（ロストック、1993年1月15日）

## ロストック：1992年8月、暴力の拡大 事実と背景

カール・ハインツ・ヤーンケ

＊

1992年8月にロストック市の名前は、世界のあらゆる所でドイツで増加する外国人敵視と右翼過激主義のシンボルとして知られた。

この日に何が起こったのか？

事件の中心地は、60年代から作られた郊外の住宅地であるロストック・リヒテンハーゲンであった。そこにこの北ドイツの港湾都市の約25万人の住民のうち約2万人が住んでいる。

団地の真ん中を、州政府は1990年にメッケルンブルク・フォアポメルン州の難民収容センターにした。1992年の5月からその建物は満員となった。毎日、

70人から80人増えていた。受け入れ施設を見つけてなかった人々は、収容所がいっぱいだったためメッケルンブルク・アレー18番地の建物の回りに野営した。外国人とこの街区の住民にとって状態がしだいに堪えられなくなった時、多くの市民と市警察はシュベリーンの州政府とボンの連邦政府に嘆願し抗議した。しかしそれに反応がなかった。責任のある2、3の連邦大臣が7月と8月にメッケルンブルク・フォアポメルン州に来たが、誰もロストック・リヒテンハーゲンに行かず、堪えられない状況を変える手助けをしなかった。暑い夏の日々に雰囲気が悪化した時、市参事会が8月22日の夜、州政府と他の責任ある部局の無責任な態度に抗議する穏やかな集会を呼びかけた。

この夏の夜に重い責任のある誰もまた来なかった。そして市の代表が責任のがれの返事をしただけだった。それは、9月1日に収容施設が他の場所に移されるはずだと言うことだった。即時の助力、例えば難民のための衛生的な施設の設置による、は行われなかった。この状況の中で難民宿泊施設のすぐ近くに住んでいた多くの市民のもとで怒りと憤激が支配したのは当然だった。この雰囲気は、2、3百の青少年、そのなかには多くの12歳から15歳の者がいた、を刺激し、外国人が住んでいる建物に対し攻撃を始めさせた。数時間以上警官との激しい衝突が続いた。2、3千の大人達が暴行者の行為を見物していた。そして一部分は拍手をした。

次の晩と夜にシナリオは繰り返された。青少年の数は増えた。右翼過激派が他の土地からやってきた。同様に見物人のグループも増加した。この夜には、石、火炎ビンと照明弾で様々なヨーロッパ、アフリカ、アジア諸国からの外国人、なかんずくルーマニアからのジプシーが宿泊していた収容センターを襲撃することが試みられた。数百の警察官は放水と催涙ガスでこれを防ぐことに成功した。聞き逃す事の出来ない叫び声、「外国人は帰れ!」「外国人の下司野郎」そして「ドイツはドイツ人の手に」がおこった。市のこの地域における改善を必要とする状態と責任ある政治家の無関心にたいする激しい怒りは、庇護を求めている外国人に転化された。

8月24日の午後シュベリーンの州内務省は右翼過激派に降伏し、ロストック・リヒテンハーゲンの難民収容センターを空にした。外国人はバスでメッケル

ンブルク・フォアポメルンの他の場所に移された。

それにもかかわらず、そのあと激しい暴力行為がリヒテンハーゲンでおこった。約800人から千人の青少年が、およそ3千人の見物人にけしかけられて、警官隊と激しく衝突した。22時頃メッケルンブルク・アレー18番地の建物の回りに配置されていた警官隊が引き揚げさせられた時、それらの青少年は火炎ビンで建物の一階を火の海にした。そこには、数年来2国間協定による労働者としてここに住んでいた多数のベトナム人が居た。

ベトナム人たちと2、3人のドイツ人のぎりぎりの危険をおかした行動でこれらの人々は救われた。ベトナム人を最初に助けたのは、屋根を伝わって入った隣の建物のロストックのドイツ人家族だった。

激動の時間の間、当の建物にとどまっていたZDFのテレビ取材チームやその場のすぐ前にいた多くの報道関係者によって、ロストックの衝撃的な夜の出来事はすぐ世界中に知らされた。警官の配置に責任を持つものの完全な失敗があきらかにされた。

翌日しばしば次の問いが投げかけられたのは当然である。「亡命者庇護法を強引に変えるために、身の毛のよだつような方法で政治的戦略が行われたのか？」すでに8月24日に連邦内務大臣ザイタースは、ロストックに短期間滞在した際、次のように説明した。「ロストックの出来事は、世界におけるドイツの威信を大きく傷つけた。この事件が今の法律は不十分であることを示しているとすれば、経済難民の無制限な入国、特に東ヨーロッパからの、という中心問題には法律の強化でのみ対応することが出来よう」(『オストゼー新聞』1992年8月25日)。

なおまた8月25日から26日と26日から27日にかけての夜に、リヒテンハーゲンで外国人に対する右翼過激派の不法行為と彼らと警官との衝突が起った。

8月27日になって、ロストックの中心部、大学前広場に、「ろうそくをすべての家にともそう」を合言葉に数千のロストック市民が外国人敵視と外国人憎悪に反対する抗議集会に集まった。8月29日の土曜日には、ドイツの様々な所から2万人以上の人々が、「外国人憎悪とナチの暴力反対」を要求し、外国人同胞と難民の擁護のため人種主義、ネオ・ファシズムと右翼過激派の暴力に

反対の声をはっきりとあげるために、リヒテンハーゲンにあつまった。警察と他の国家機関の制止にもかかわらず、ドイツの民主勢力が右翼過激派を阻止することを決意したことをはっきりと示すためにこの行動が行われた。

ロストックとメッケルンブルク・フォアポメルン州を越えて、1992年8月のこの事件の反響は広がって行った。多くの人々に不快感と恥ずかしさが支配した。どのようにしてそんなことが起こり得たのか、この種の犯罪の原因はどこにあるのか、だれがこの責任を負うのかということが、きびしく問われた。

様々なメディアでロストックの事件は関心の的になった。表面的な刺激的報道は、事件の背景と基盤についての本格的な分析の試みに替わった。まもなくドイツへの難民の移入を制限することが不可欠であるという立場が、様々な地域で優勢になった。州と連邦政府によりこの立場は支持され、発展させられた。

この日々にボンの連邦政府とシュベリーンの州政府から外国人にたいするテロについて恥ずかしさや道徳的憤激の声を聞いたのはほんのわずかだった。連邦政府みずから外国人との連帯、および貧困のゆえに様々な地域からドイツに来て、右翼過激派が新たな苦しみを与えた人々への全面的な助力の意図をはっきりと示さなかった。そのかわりに基本法16条の破棄を含む庇護権の変更のための討議が強引に行われた。

同じ時、ロストックの事件はドイツのあらゆる所でネオ・ファシストと他の右翼過激派の勢力を活気づけた。9月から11月までに外国人、一部にはユダヤ人と障害者に対する暴力が一層拡大された。この拡大とともに、国家社会主義と第三帝国への賛美の声が増加した。驚くべき方法で人種主義、反ユダヤ主義と外国人敵視が広まった。暴力行為者にたいする警察の毅然としない態度と裁判の寛大な判決が、この風潮をさらに悪くした。事態の進行は11月22日と23日に頂点に達した。それはメルンでのネオ・ナチの放火とそれによる3人のトルコ人の死であった。

ロストックの8月22日とメルンの11月23日の事件は、ドイツの状況の深刻さを予示している。それらは連邦共和国があらたにその歴史の区切りを向かえていることを際立たせている。状況は右翼的傾向へ一層進むのか、それとも反転

に成功するのか？ これは、1993年の選挙と連邦議会選挙（1994）で決まるに違いないし、決まるであろう。

12月に、特にメルンの事件のあと、ドイツの様々な地域で10万の人々が外国人敵視、人種主義とネオ・ナチに反対する意志を表明するために街頭に出た。特に際だったのはケルン、ベルリン、ボン、ミュンヘン、フランクフルト／マイン、ハンブルク、ライプツヒにおけるデモ、沈黙の行進、コンサートそして光の鎖であった。これらの行動は、それがまだ遅くないことをはっきりと示した。東と西の内外の百万の市民は、ドイツ連邦共和国の民主主義の基本秩序、ヨーロッパと世界における平和な共同生活、ならびに国籍と皮膚の色を問わない、すべての人々の根本的な社会・政治基本権を心から擁護した。

これはしかし、すべての始まりである。将来の大きな危険はまだ封じ込められてはいない。さらに今後しなければならない事がある。それには1992年の夏と秋の事態が進展した原因をくわしく分析することも含まれている。その際の鍵になるのは次の問いである。どの程度まで20世紀ドイツ史と深く関係しているのか、特に第二次大戦におけるドイツの役割との、ワイマール共和国の没落の原因と1945年以後の展開を含むドイツ国民と隣人にとっての第三帝国の結末との結びつきである。

特別な結果が、暴力と外国人敵視が拡大した都市と地域で生まれた。それはロストックにも当てはまる。8月の事件の後、街の反応は矛盾していた。多くの市民は彼らの街のことを恥入り、だれかれの区別のない外国人に対する暴力行為の原因と責任をあげることに、責任を問うことを要求した。事件を故意に過小評価することを試みた人々のグループも少なくなかった。彼等の考えによれば、ふたたびいつもの状態にもどるべきで、ロストックの不名誉は忘れ去られるべきであった。その際、地方自治体のトップの責任者がおのれの責任を受け入れず、暴力の拡大の原因を他に探したことが重要であった。シュベリーンの州政府とボンの連邦政府が、ロストック・リヒテンハーゲンの難民収容センターの堪えられない状態にたいし大きな責任を負うのは当然である。

ロストックの市のトップで責任のある政治家が、外国人と街の災難を未然に防ぐために全力を尽くしたかどうか、はっきりと問われるべきである。その

ために敏速で明確な説明が必要である。

しばしば、警察指導の失敗が語られている。確かに、怠慢と誤った態度があったが、この点についても十分な説明が必要である。

外からのネオナチが決定的な糸を引いたにちがいないということに、一層耳が傾けられなければならない。実際、他所から来た右翼過激派青少年とその黒幕が積極的に参加したことは証明できる。

しかし、外国人を攻撃し、収容施設を燃やし、外国人排撃のスローガンを叫んだ青少年の多くがロストックに住んでいたのは事実である。さらに、数千の大人達が外国人への野蛮な行動を何の行動をとらずに見物し、あるいは拍手を送ったことが、はっきりと証明されている。8月27日に、ロストックで発行されている『オストゼー新聞』の編集長ゲルト・シュピルカーはあるコメントに書いている。すなわち、「過激な暴行者は数千の市民とその利益代表者によって歓迎され、彼らの一部分ナチス的な方向は大目に見られるだけでなく、驚くべき拍手をえている」。

これらの事実は、真剣に取り上げられねばならない。ドイツ民主共和国で育った大人と青少年がそのような態度をとるのは、いかにして可能なのか。こういうふうにして参加したすべての人は、誰も自分に罪なしと出来ない罪を背負い込んだ。しかし、罪を責任を彼らだけが背負い込んだわけではない。歴史においてしばしばあったように、参加した若者の有罪判決と起訴によってスケープゴートを見つけ、責任を彼らにのみ押しつけたことの危険が現在すでに存在している。いいかげんな態度は、あれこれの中心的問題にたいしてまさに有害で、ごまかしである。いま、包括的で深い考察と評価が必要である。

厳密に検証されるべきことは、ドイツ民主共和国の歴史のなかにこの種の態度の諸原因がどの程度まで探られることが出来るかである。これは、とりわけナチス政体との対決と外国人との関係にあてはまる。

さらに、暴力行為によって連邦共和国へのドイツ民主共和国の合併以来の生活条件の変化がいかなる重みをもっているかが、検証されなければならない。リヒテンハーゲンは大量の失業とあらゆる家族の社会的衰退によって特に強く不利益を受けているロストックの市街区に属している。多くの青少年はここに

ち職業上の展望を見いだしていない。さらに、リヒテンハーゲンで8月の中旬までにほとんどすべての青年クラブや他の余暇施設が閉鎖されたことが欲求不満を強めた。

ドイツ統一による希望は、今までの（旧ドイツ民主共和国における：訳者）自己同一と全く同じように破壊された。多くの面にわたる失望は、攻撃性と暴力の拡大を生じさせた。この雰囲気のもとで、右翼過激派諸勢力はせき止められていた怒りと絶望をしいに難民、それに困窮している人およびもっと困窮する人に対し向かわせることに成功した。

色々な観察は、なお一つの基礎的な分析を要求している。様々な人々がそれを始めた。その結果、連邦および州政府の援助でロストックの若者の生活の創造のための新たな条件が生まれるべきである。最も重要な事が青少年と両親に就職口を作ることによって新たな生活に対する勇気をあたえることであるのは、確かである。彼らは必要とされ、尊重されることを再び経験しなければならない。

人種主義と外国人敵視のイデオロギーの基礎をより強力にあばき、特に青年のもとで解明することが将来のために必要であることも確かである。当然にも、マドリードで発行されている新聞『エル・モンド』は1992年8月26日付けでこう書いた。すなわち、「ドイツはネオ・ファシズムの芽を抑えただけである。そこにイデオロギーのねっこはなくなっていない。」。これは第三帝国時代のドイツの役割——戦争後のふたつのドイツ国家との関連を含む——についての包括的な説明・教育を要求する。

新しい状況、1933年のように過激な右翼勢力がドイツを支配することに成功するのを今回さまたげる努力は、ドイツと世界の将来に責任を感じているすべての民主主義者の共同の行動を要求している。



## ロストックの青年

### 暴力の予備軍か？

マンフレッド・ヴェント

＊

ロストックのリヒテンハーゲンの出来事に注目した世界の世論からこの町だけでなく、その住民特に青年は評判を悪くした。

世界は写真を見て外国人を敵視するスローガンをどなっている集団にぞっとした。近くの人でも遠くの人でも、バット、石、火炎ビンで武装した集団に不安をかきたてられた。高年者はナチのシンボルをもちヒットラーの敬礼をする集団を眼の前にしてドイツ史の暗黒時代の始まりを思いだした。

戦慄、不安そして最もいやな記憶を呼び起こしたのは多数の青少年であった。これらの少年と少女たちが外国人を憎み、彼らを野蛮な暴力をもって襲うことが出来るのは想像を絶するし、同様に彼らが戦争とファシズムの時代から彼らの自己同一性を引き出すことは理解に苦しむ。若さだけが彼らに暴力的行動への権利を与えているのではない。確かに彼らにはまだ分別がない。しかし、極端な暴力に直接出会う時期、それもその最盛期がきた。1992年8月にリヒテンハーゲンで起こった事は、起きてはならない事だった。望むらくはずっと最初の多くのやじうまと拍手した人だけであってほしい、あの恥ずかしいばかりの認識では、抗議を示したり、問題を解決することを模索するはずもないし、その必要もない。

リヒテンハーゲン92は、典型的なロストックの青年の態度を示す言葉ではない。ロストックには、14歳から17歳までの少年約1万7千人と18歳から28歳までの青年3万2千5百人以上が住んでいる。彼らのほんのわずかな者が、8月の襲撃を行ったのは明らかである。新聞報道は数百人の若い過激派とおおよそ150人から200人の人々の記事から始まっている。彼らはナチ式敬礼によって過激派の中核的人物であることを象徴した。8月22、23日の週末に続く日々に、あらかじめやるべきことを決めていた他の暴力的青少年が観察された。右翼過激派の組織者は、ベルリン、ハンブルク、リューベック、ヴィトシュトックその他からやってきた。7日後のリヒテンハーゲンで、最初の石を投げたのは13

歳と14歳の少年だった。「それで事は始まったのさ。列車に長く乗ってきたのはこれ以外にないさ」とザクセンなまりで1人の少年がしゃべったことが1992年8月28日付けの『オストゼー新聞』に引用された。最初は自然発生的に始まりそれから組織化されたかどうかはどうしてもよく、起こった事が容易ならざることなのだ。しかもロストックの住人が真っ先にそれに参加したのだ。

外国人に対するロストックの青少年の態度は、大人と同じく様々である。それは、外国人と闘う気持ちをもった完全な拒否から、彼らを区別する態度（政治的難民の受け入れに賛成し、経済難民の受け入れに反対する）、積極的な連帯までに及ぶ。しばしばドイツ民主共和国市民には文化の異なる人との共同生活に慣れる可能性が組織的に与えられてなかったのは不当であると言われる。全くそれは事実ではない。例えば、学生として大学生活で、外国の大学での交換留学の間、あるいは当時の夏休みのなかで、誰が外国人と一緒になれなかっただろうか。またすでに早い時期から、産業の重要部門でベトナム、キューバ、アンゴラ等から来た外国人徒弟と労働者が働いていた。彼らをドイツの労働集団に組み込むか、少なくとも彼らとドイツ人が普通の結びつきを作るとは、たとえ遠慮がちであったとしても、ドイツ民主共和国の時代に社会での討論テーマになっていた。当時共同生活は簡単ではなかったが、時には非常にうまくいった。一部今でもロストックで生活している当時の外国人には、難民と外国人労働者に対する決まり文句はつきまとわなかった。統一後のこんにち、基本的に異なった枠組みが生じた。すなわち、複雑化した経済的・社会的前提のもとで、外国人問題に関する政策がうまく行かない経験の様々な影響の下で、我々はいわゆる外国人問題に直面させられている。

すでにリヒテンハーゲンの事件の前に、すなわち1992年の早い時期に、UCFF（経験社会・政治・コミュニケーション研究独立センター）ロストック協会はロストックにおける難民の受け入れについての研究を行っていた。それがとりわけ明確にしたのは、ロストックの住民の相当部分が難民をほとんど受け入れないということであった。老人も若者も、地位の低い勤労者も高い勤労者も、男性も女性もそうであった。外国人を拒否するか受け入れない人を社会構造的に何らかの方法で囲い込むことは出来ない。その限りで、難民収容所閉鎖

の問題は決して青年の問題だけではない。これは、リヒテンハーゲンの8月の日々に実証された。

しかし、ロストックにおける青年の暴力は外国人にのみ向けられているのではない。青年の暴力は青年犯罪の深刻な拡大のなかにも存在する。公共施設、スーパーから幼稚園までへの押し込み強盗、放火、自動車泥棒、往来でしかも白昼の襲撃。ほとんど毎日地元の新聞はそれを報じている。1992年のこれらの結果は、東部ドイツにおいてメッケレンブルグ・ホアポメルン州は青年の刑事上の犯罪行為で最高の割合になっているようである。1992年の前半に取り調べられた犯罪容疑者の約40パーセントは21歳未満の若者だった。本格的な青年の徒党が組織されている。ただほんの少数の人が組織されているだけだが。35人の16歳から21歳の青年、そのうちロストック出身33人が所属した1992年秋に作られた徒党のように。彼らはロストックのリュッテンクラインに集まり、数カ月にわたって犯罪行為を計画、実行した。多くは盗みで、総額150万マルク（日本円で約1億5百万円）にのぼった。この例は唯一ではない。青少年により市民が物を奪われたり、乱暴されたり、校庭で年下の者が殴られたり、13歳の少年によってもう自動車泥棒が始められているということが毎日のように報告されている。

世間はこの間これにすでに甘んじているのか。それともこの事態の推移にある種の冷淡な態度をとっているのか。それはおびえであり、破滅的な結果をもたらすとは思いたくない。

ひとつの「事件」に対する偏見が引き続き目立っている。すなわち、「右翼」、「左翼」、「自治主義者」などなどに関係づけることや、これらのグループ間の対立が野蛮な暴力により決着をつけられていると見ることである。

今やロストックの青年は特別に暴力的なのか。彼等はドイツの青年の特殊な周辺集団にすぎないのか。

それは違う、違うのははっきりしている。ロストックにはおおむね青少年の「全く普通の」成長があるからである。他の地域と同様に、ロストックの男女青年は学校教育と職業教育を受け、環境を良くするため、戦争のない世界のために積極的に行動し、自由時間には音楽を聞いたり、スポーツや、旅をし、愛

と性を体験している。

「普通の青年の生活」はもちろん対立の満ちた世界で、変化が感じられる世界で行われている。これは理解されそして適切に対応されなくてはならない。ロストックだけでなく、新5州だけでなく、ドイツだけでなく、暴力が増大する傾向がある。ビーレヘルト大学教育学部教授ヴィルヘルム・ハイトマイヤーは、1992年10月16日の『ツァイト』紙で「どんな場合でも、フル回転で走っている技術・経済の発展と人間の社会化されていくゆっくりしたテンポの間には破壊的な対立がある。」と確認している。そしてまた彼が中心問題として「社会的、職業的、政治的崩壊過程（をあげ）、それはもはやなんらかの周辺集団に限定されない、それらは社会の核をまきこんだ」と指摘してることに同意する。

崩壊過程に新5州の人々は特別な方法でさらされている。ここには、古い刻印と新しい発展が、全く新しい種類の矛盾が生まれ、様々な反作用に続いて起こる、という具合におたがいに衝突している。最も忌まわしいものは暴力である。それに青年は非常に引かれやすい。なぜか。それをロストックの少年と少女は例えば1992年の11月のあるテレビの討論会で率直にこう言った。「暴力には社会的理由があるのよ！」失業は新しい時代のメルクマールになった。労働市場で若者は不利である。なかんずく修業の後、雇用関係に受け入れられない青少年は狼狽している。1993年になっても、学校卒業あるいは修業のあと徒弟や働く場を見つけられないというしばしば存在する不安は、当然である。今年学校卒の半分から4分の3だけを斡旋できるとロストックでは計算されている。秋に職業訓練の場や大学を必要とする、5900人のハウプトシュレーとリアルシュレー、ギムナジウムの生徒達のためには、1993年の初めやっと1500の職業訓練の場が準備されているだけだ。特に若者は失業に狼狽している。彼らにはその年齢とより少ない家族扶養義務のゆえに職業上の流動と「待命」がより強く要求されている。そして、ドイツ民主共和国の制度の下で、今ではしばしば公認されなくなった職業資格をえた若者も狼狽している。ドイツ民主共和国で一般的だった国家により調整された斡旋機構の消滅は明らかで、今や各人が自分自身で職業訓練の場と職業を探さねばならなくなった。そうしたことと結

びついたストレスと集中して短期間におこった全面的な社会的環境の崩壊を克服する能力を、若者は学び身につけてなかった。

ドイツ民主共和国の崩壊とともに、規範、価値、理念、自己同一、資格、社会的結合は価値を失った。ドイツ民主共和国の40年のいわゆる聖職剝奪と道徳的価値喪失がおこった。若者も統一ドイツへの発展を望み、圧倒的多数の人がまさにそれを望んだとき、人々はそれを自ら実行に移した。しかし、それは苦悩を引き起こしてまで実行されねばならなかったのか。1991年のアンケート調査によれば、メッケンブルグ・フォアポメルン州の青少年の半分はこの州で彼らの未来をもはや期待してないということが悲しみをひきおこさないのか。

ロストックの青少年はさらに自らについてこう言う。すなわち「学校が終わると街に行く、ぶらつく、活気がなく、退屈で、どこででも絶望するのです。我々は行動したい」。しかし、誰もドイツ民主共和国の教育国家という昔の状況を望まない。そこではすべての子どもと青少年を連続した教育階梯のための社会主義統一党の党派的教育が支配していた。誰もほとんど一日がかりの教育学的教育過程を望まない。そこではより早く組織するか組織された。誰も昔の教育の理論枠組みを望まない。それは、しだいに現実から介離していることをきづかせ、その結果強引に青少年の自己同一性と社会との衝突に導き、そしておそるべき事には青少年の個性の崩壊に導いた。大筋においては、当時子どもや青少年にとって、自由時間が管理され、自由行動の余地がうめられ、活動への関与が決められていたことが重要だった。しかし、実際に受け継ぐものは何もなく、新しい社会に生かし続けられ、守られる値打ちは何もなかったのか。学校と学校外の活動団体、スポーツ団体、青年クラブなど沢山のものをもっていた余暇の領域はほとんど破壊されなければならないのか。それはそうになっている。メッケンブルグ・フォアポメルン州において、1991年に公表された読書法人の調査によれば、青年センターと青年クラブの51.5パーセントが閉鎖された。それは新州のなかで最大の閉鎖率だった。ロストックでは1990年以来11の青年クラブが閉鎖された（ロストックには、地区毎に3から4の青年クラブが、合計約35あった。：訳者）。

職業訓練や就職の場の見通しが無いこととともに、余暇活動の機会の提供が

無くなったことが青少年にとって中心問題となった。確かに以前にもそれらは充分ではなかった。ロストックと新市街区でのこれらの施設は青年の必要を十分に満たすものではなかった。しかし、多くは他のもので補充されていた。教師が責任を負った学校の行事、工場と国家施設が可能な限り提供した余暇活動、自由青年同盟によって指導された青年クラブと集会によって。これらすべてが崩壊した。多くは幸いだったが、青年が気軽に、安価で集えるかつての余暇活動の場と空間もすべて崩壊した。

ロストックにも青年活動を新しくつくり、その内容を新たに決め、クラブと青少年計画に特色を与える目に見える努力があった。1992年11月にはロストックに青少年州助成計画以上に共同出資される31の青少年計画と11の市の青年の集いがあった。20人の任命された街頭ソーシャルワーカーと約40人の民間篤志家が、ロストックで青年・ソーシャルワークに専念している。この努力は今までのところかすかな希望以上のものではない。シュベリーンの州政府は、青年政策における「へぼ職人」という非難を甘んじて受けねばならなかった。「特別計画がいつも他の問題を引き起こすだけなら、結局合理的な管轄を越えた構想が見つけれねばならないだろう」と1992年11月の社会民主党シュベリーン地区会議で同党議員団は述べた。青年施設の維持を文部大臣から地方自治体の管轄に移すことは解決にならない。約束された財政助成手段が適切な時期でなく（1992年では11月になされた）青年活動を自主的に始める諸条件に用立てられないから、それはリップサービスにすぎない。街頭補導員に正真正銘の政治的援助を与えないで、問題が起これと彼らを意識するのでは不十分である。

ロストックの衛星都市に、いわゆる民間篤志家に移される文化センターを作るのは、多様な努力がいる。それで新しい構想を現実化することが試みられている。その仕事は地域の必要性と全住民の広範な必要性に合わせなければならない。それは、主要にはディスコの空騒ぎを伴った青年クラブとしてしばしば行われていたかつての行事とは本質的に全く違う、幅広い催し物が提供されている。1992年の秋にエヴァースハーゲン地区に新たに再開された青年・文化集会所「パブロ・ネルーダ」では、催し物は子どもの午後から、子どもと大人のための陶器作り、生徒劇場、クラブフィルム、ギタークラブ、ラジオドラマ制

作と書き方教室（前述の2つの催しは1993年中にひとりの協力者のABMの仕事が無くなるので終わりになる）、ダンス、ポップ体操、さらに身の上相談と現実問題の円卓討論まで多彩である（ABMとは、Arbeitsbeschaffungsmaßnahmeの略。職業安定所の委託を受け、長期失業者に公的仕事を提供し、一定の手当を払う失業救済機関。救済期間は最長2年。：訳者）。それにもかかわらず、「ネルーダ・クラブは私達がのぞんでいるものを必ずしも提供していない」と約30人の少年少女からなるエヴァースハーゲンの青年グループに所属する15歳の少女は言っている。彼らが望んでいるのは、じゃまされないで集まり、話し、踊り、音楽を聞くことができる場所である。

「青少年はグロースクラインのスキングループ『マックス』や抵抗的な場をもった自立的なグループである『ジャズ』のような出会い、いわばそれらにある何かを求めている」とロストック市青少年事業部長ペーター・ノイツリングは評価している。市街区における青少年の文化的会合のひろくかつ専門化された催し物が受け入れられているかどうか、問われるべきである。今までの経験では様々である。なかんずく、子どもや年少の青少年によってコースなどは満たされ、17、18歳の年かきの者は彼らの利益をほとんど考慮されてないと感じている。年かきの者には彼らが住んでいる、彼らの独自の住居地域で会合、例えば団体の結成について、を作るという自主的なイニシアチブが増加している。その際、彼らは政治家の無関心、無視にぶつかるだけでなく、住民からほとんど支持を受けない。エヴァースハーゲンだけでなく、リヒテンハーゲンの若者は、地域住民によって追い出されるというにかい経験をしている。リヒテンハーゲンでは青年の集りのための住居コンテナ設置に、ある両親の努力で許可を得ることに成功した。しかし、ここの住民の多数は騒音の不安から反対し、それを阻止した。この例は、次のことを強調している。すなわち、青少年はあまりにもしばしば「普通の市民」から支持を受けていない。彼らは青少年の生活スタイルと表現形式に理解を示していない。

簡潔に言えば、青少年は見捨てられていると感じている。すなわち、暴力的に遵法・権威の損害を受け入れなければならなかった成人一般から、青年問題の解決を優先課題にしない政治家から、若者の評価に従えば「極右と暴力から

青年をまねがれさせる機会さえ持たない」教師から、日常生活で権威を失ってしまい、街頭の暴力の対極として家庭生活を作る状態にないあるいは作ることが出来ない親から。青少年の世話をし、彼らの目的のために青年を獲得しようとして本格的な「金鉱掘り出し人の態度」について語っているのはネオ・ナチである。彼らは明らかに、はっきりした上下関係をもった集団生活を提供している。1人1人はここで彼の居場所と明確な指針を見つけていると勘違いしている。外国人は困難な状況に責任があると公言されている。それへの態度は明確である：暴力。

全社会はこれにたいし断固たる処置をとることが要求されている。特に政治家は。しかし、政治的怠慢がある。青年については特に。「政治家はしゃべったことをほとんど実行しない。青年のために特別なことは十分にされていない」——これは、ロストックの若者に広く普及した見解である。1989年、90年の時から、あまりにも多くの約束が守られず、到来した重荷への注意はほとんど払われなかった。右翼過激派と暴力は貧弱な社会的統合の証拠である。いかに貧弱な社会的統合条件の構造が真実であることが証明されたか。青少年は新たに作られた政治的・社会的構造の中に自分の位置を見つけていない。それは彼らにとって非常にむずかしい。なぜなら、民主主義がまず学ばねばならないし、政治的・社会的構造はマルク市場の中で機能するようになっていない。そのうえときどき支配的な西ドイツの利益が溝を埋めるのではなく広げているからである。

そして、青年をより強く全社会に統合する課題は二次的なものにとどまっている。若者が暴力によって自分達に注目させ、その結果衆目を浴びるのに成功している時、青年問題は億先順位のリストの上のほうにはあるが、第一順位ではない。対決、しかしまた理解と寛容が物的・精神的投資と同じくらい問われている。青年への投資は、依然として将来への投資である。ロストックにもそれを援助する意志を持ち、青年のために青年とともに仕事をする人々が沢山いる。彼らはひとつの可能性であり、その可能性をこの街とそこの人々の利益のために非常にひろく活用することが大切である。



## 外国人敵視と人種主義 20世紀のアナクロニズムについての考察

インゴ・コッホ

＊

ホイヤールベルダ、ロストックそしてメルン。新聞の大見出しで世界的に有名になったこれらのドイツの都市。新しい技術的あるいは経済的知見ではなく、質の良い文化や国際的なスポーツ競技での新記録ではなく、多くの人にすでに忘れられていた事柄、すなわち外国人敵視と人種主義の復活のためにである。この事件——放火と略奪と最近起った3人のトルコ人の虐殺は人々を動揺させた。しかし、多くの地域での光の鎖とデモは、世界に開いた他の進歩的なドイツがあることを世界の人々に示したし、示している。ラジオとテレビは暴力の拒否と外国人への同情を訴えた。

そのために訴えられる事柄はあまりにも自明なことであるのは疑いない。しかし、そのようなものとしてのその事実は、この間にドイツにおける政治的文化とモラルがいかなる段階になったのかを示し続けている。

政治家、科学者、ジャーナリスト、評論家は、憎しみ、外国人敵視、暴力の支配という特異な事柄のおこる理由を探している。様々な説明が試みられ、問題の克服のために戦略が提案され、具体的な対策がとられている。

確かに、ドイツ、特に東ドイツの現在の状況をワイマール民主主義期の政治的展開と図式的に比較するのは適切でない。しかしにもかかわらず、映像は不吉にもお互いに似ているし、起こりうるその危険性に注意を向けさせる。「ボンにはワイマールではない」というような軽率な結論をさけるべきである。なぜなら、民主主義は固有のよりどころをいつのまにか失い得るからである。ドイツの難民政策のあらたな展開が、政治家がたとえそれを理解しているかどうかにかかわらず、右翼政治陣営からの圧力に譲歩する準備であることを明確に示している。

メディアによって正しくかつ効果的に知らされた大規模な反対デモ参加者は、ドイツの広範な住民のなかに潜在的に意識下の人種主義があるという事実

に目をつぶってはならない。全ドイツ、中でも当時のドイツ民主共和国に住んでいた人々には、社会保障あるいは手に入れるのに困難な小さな幸せを分かちあうことや失うことへの不安がある。エゴイズム、大きな世界の問題とその歴史的現実的原因についての貧弱な知識——第三世界の国々の近づきつつある生態系の危機、飢餓と貧困、多くの西側産業国家における貧しさと豊かさの間の一貫して深まる亀裂——は、苦勞して働いて手にいれた物が注意深く守られることにまったく導かない。しばしば、倫理的な構えは全体的な問題が個別の問題でもあり、共通にのみ解決され得るということを承認することを欠いている。政治家と民主主義的諸党派、すべての領域の科学者、芸術家、それに教師は、世界の問題の原因のために視点をとぎすまし、すべての人々が人間として当然地球の富の利用を持つことを伝えることを今まで以上に要請されている。しかし特に政治家は、獲得された社会的水準が破壊されることを許さないことと、社会的公正が国内の平和の重要な要素であることに同意する義務を負っている。社会的弱者が社会から忘れられたり、社会的経済的困難が彼らの負担で取り除かれるのではないかと思うようになってはならない。

問題が些末なこととしてあつかわれてはならない。すなわち、地球の大地の生態系の許容範囲の論理がさいげんのない経済成長が継続可能ではないことを示しているのは明確である。大地は世界に広まった環境破壊の犠牲のために、西側世界の豊かさをこれ以上堪えることは出来ない。十分に新しく生態学に方向付けられた世界経済秩序は、今までの成長計画を削減して現実化されるだけである。絶対に大地を豊にするすべての領域のために把握した経済促進方策が必要である。その際、第一に飢餓による大惨事や伝染病の防止や緩和のための人道主義的な助力を優先するのではなく、経済分野の再建のための助力、自助のための援助が大切である。世界経済発展の現状では、これらの支援は西側の産業国家によってのみもたらされることが出来る。

ドイツとドイツ人にとっては、あらゆる点でヨーロッパと世界の民衆に対しひとつの道徳的義務が生じる。

2度にわたってこの国は大陸を戦火にさらし、世界を支配し他国民を抑圧し、絶滅することを始めた。戦争の結果は結局、恥ずかしいほどの自制に導

き、ドイツ国民が他国民にもたらした苦しみについて絶えることのない熟慮をもたらした。「大国民の」真意は経済的種類であり、そのために彼らは権力と影響力を行使した。「小国民」にとってその真意はイデオロギー的に紛飾され、「不倶載天の敵」、「君主的人間」、「国境なしの民族」が問題とされた。

厳密に言うと、獲得された豊かさをこの土地に流れてきた庇護を求めている人と今わからあうことと、彼らの故郷で人間的価値のある存在を築くことを他国民に可能にする行動戦略を、期待されているように発展させることより他に何も残されていない。民主主義的統治機構の保障、ならびに人々が彼らの経済的存在を一貫して守ることができるために必要なものとその前提を作ることはこれに属する。この前提が作られてないかぎり、ヨーロッパ産業国家は移住に対応するべきであり、経済的に豊かな国としての道徳的義務にふさわしく振る舞うべきである。

問題が些細なこととしてあつかわれてはならないと言われているが、それ以外に政治的・道徳的に合理的な対案はない。それに加え、ドイツで責任を自覚している人間は、庇護権の制限が社会のなかの道徳的基本的価値の損失への一歩であり、極端な暴力という目的と右翼過激諸党派中央部の黒幕との妥協であることをはっきりと知っている。その勢力が宣言している目的——これは非常にしばしば説明されてきた——は、国家に圧力をかけることであり、強制することである。国家のあらゆる退却は右翼から民主主義にたいする勝利として祝われ、侮蔑されている。既成政党にとって——結局彼らは選挙民の投票によって存続している——「難民問題」への妥協は、短期間で終わる小さな災いであるかもしれないが、解決にならず、言葉の最悪の意味で大衆迎合政策にとどまる。

1922年12月10日に『シュテルン』誌の出版者かつ編集者であるロルフ・シュミット・ホルツは次のように書いた。「暴力の準備は、政治的確信と綱領から、実際にはヒットラーがおこない、ユダヤ人にすべての責任を負わせたあの多くの人が知っている国家社会主義から決して出て来てこない。右翼の暴力は、無知、愚鈍とフラストレーションの土壌から生じた。なかんずくしかし、それは自然に存在しえなかったであろう。右翼の暴力は、暖かいためガスがブクブク

でる沼に咲いた毒の花である。それは、ドイツに広くひろまっている潜在的な外国人敵視の沼である。火炎ビンで多数意見を大胆にも表現すること、それは自己同一化をもたらす気分を実行者に与える右翼的心情の沼である。沼がかわかされてないかぎり、沼は新しい有毒なガスをつくりだすに違いない。」

事実、ロストック・リヒテンハーゲンにおける事件は、犯罪者の行動が物見高いロストック住民の拍手により容易にさせられ、そして青少年はそこから一層動機づけを汲みとったことを証明した。あとでは非常にあっさりと「それをわれわれは欲しなかった」と言うが、しかし非常にしばしば「しかし、状況は破局的でジプシーは悩みの種である」と言う。あらゆる同時代人の苦勞を感じることは、他国民の心的傾向、生活感覚と生活方法、伝統と自己理解を寛大に扱うか受け入れることは非常にまれである。偏見は思考を決め、そして喜んで他国民に対し寛容さを示す気持ちをおこさせない。

不寛容、イデオロギー的頑迷そして人為的に作られた憎しみは、第三帝国におけるユダヤ人、ジプシー、同性愛者、障害者や不治の病人と政治的対立者の迫害と絶滅にたいする共犯者でもあった。そしておそらく、一般々に「経済難民」と「見せかけだけの難民」の必要だと誤ってとらえられた拒絶と他国民とのそれを区別する一線は、今日でもまたあまりにも簡単にのりこえられてしまった。ドイツの最近数カ月の事件——学生への脅迫、ポーランド人への襲撃その他は、これをあまりにもはっきりと示している。

右翼過激派の暴力行為の意図の基底、イデオロギー的背景は、今日多くの政治家や評論家が注目しようとしているよりすみやかにドイツ史のなかに探されるべきである。当然ながら、その際には暴力行為が表面的に考察されるだけでなく、行為者がその行動のために与える理由づけが考察されなければならない。そこではナチスの要素がいわゆる「こんにちの状況」から生じる根拠づけと同じくらいに様々にみいだされねばならない。ファッショのシンボルとしぐさの継承も目につきやすい。人種的発言は右翼過激派青少年の標準的語彙に属する。ユダヤ人墓地と記念館の冒瀆ならびに反ユダヤ主義の落書きは、特にこんにちの暴力行為のイデオロギー的背景の明白な印である。

ロストック・リヒテンハーゲンにおける数夜の暴動の間に突然表れた貼り紙

ははっきりと主張した。すなわち、「外国人の統合は民族の死だ」とビーレフェルトから行動しに来た「国家主義戦線」の貼り紙は、「ドイツ民族にしめる外国人の増加」に警鐘をならしている。国家社会主義の女性向けポスターの文章では同じ組織が次のことを要求している。すなわち、「国家主義はおまえの理想でもあるのだ」。

この間ドイツでよく知られるようになった、黄色い手が描かれ「私の仕事仲間」に喧嘩を売るな。外国人敵視と人種主義に反対」というスロガーを書いたポスターが活用されると、このナチ組織はその内容を改ざんし、同じ書体を利用して、黄色い手は「ドイツ民族から手を離せ！ 墮落、裏切り、ドイツ敵視反対」を示すことになった。国民扇動を狙った愚かな試みは見過ごされてはならない。

リヒテンハーゲンの事件の翌週のうちにハンブルクから生まれた「ロストックはドイツでありつづける」作戦は、このハンザ都市で歪曲した事実でいどられたビラを10万枚もばらまいた。そこではこう書かれていた。「暴力はならない。今や移住の禁止か市長の投票による解任。愛するロストックの皆さん！ 暴力は手段ではなく、警察が敵対するのは間違っている。彼らは非合法の移住と庇護の濫用のための国境（特にオーデル・ナイセ）を踏み越えられないで、市役所、議会そしてボンに座っている。みなさんは、既成政党が庇護濫用を変えないなら、1994年4月×日に投票で（地方自治体、ヨーロッパ、州議会そして連邦議会選挙）民主主義を防衛することができる」。同様のペールをかぶせた書き方で、さらにこう言う。「こんにち、ハンブルクではすべての街区、住居、職場は、外国人のものである。彼らは、我々の税金を享受し、麻薬屋をつれて来て犯罪を組織している。多文化社会のこの種のことに反対するのは、外国人を敵視する者ではない」。このビラの作成者は、「ロストックでドイツ人の利害を代表する市民のイニシアチブを確立することを提案し、ロストックの市役所のための1994年春におこなわれる市議会選挙に立候補して市役所にのりこむ」つもりである。ここでは気分、偏見そして「ドイツ人の秩序感」を植えつけることが完全に目指され、社会構成が誤ってとらえられ論じられている。

「自由ドイツ労働者党」の委員長フリートヘルム・ブッセは、何が大事なのかを明確に述べている。彼はロストックの若者と「討論」し、地域組織を確立したい。つまり、幹部予備軍がかならずこの暴力を拡大する青少年の中に見られるから。右翼過激派的共和党の委員長フランツ・シェーンフレバーは、彼の党が東部の全般的な不和によって支えられて、新5州の州議会に進出することを強く確信している。

人口統計学者と他の分野の社会学者によって、ドイツはさらに経済発展するために移住を必要としていることが現在指摘されている。全般的な出生率低下は遅かれ早かれ、労働力人口の劇的な減少に導くだろう。そこで将来高齢者扶助を財政援助するべきものは何か、必然的に問題提起される。連邦内務省の予想によれば、40年後までに移住民がいないとしてもなお6千万人がドイツに住んでいることになる。現在ここに約7千4百万人のこの土地で生まれた者が住んでいる。2040年には、ただちに移住禁止をした場合、1人の就業者が1人の年金生活者を扶助することになるにちがいない。ミュンヘンで出版されている科学雑誌『P.M.』7月号では次のことが確認された。「移民なしには我々の社会組織はもうすでにほとんど財政援助できない。彼らは公共金融機関に正味4百10億マルク預け入れている。『外国人は出てゆけ』のモットーにしたがって行動するとすれば、物的に自分で自分の首をしめることになるだろう。……我々は他はともかく経済が機能するために、一定の住民の層を必要とする。すでに30年前それは分析されていた。すなわち、産業は国内でまかなえる以上の労働力を必要とした。55万の空席が18万人の失業者に向かい合っていた。1961年には、1973年まで多くの東ヨーロッパとトルコの人を連邦共和国に呼び寄せることになった募集協定が発効した。その間に住民の8.14パーセントがトルコ、ユーゴスラビア、イタリー、ギリシャ、スペインその他の国民からになった」。

外国人は労働市場を悪化させるはずだという、一般に広まっている偏見は、それゆえ客観的には根拠薄弱である。デュセルドルフにある——ドイツの多くの地域で活動している——「外国人敵視と人種主義に反対する同盟——仕事仲間を刺激するなe.V」は様々なチラシで本当の状況に注意を向けさせている。そして高い失業率の連邦共和国の地域ではより低い失業率の地域より外国人が

少ないことが確認されている。「就業者中4パーセントの外国人がいるニーダーザクセンは、1988年に10パーセント以上の失業率であったが、就業者中10パーセントの外国人のいるバーデン・ビュッテンベルクはまだ5パーセント以下の失業率である」。さらに、外国人は特にドイツ人の被雇用者によってほとんど魅力的と見られてない産業分野で仕事をみつけているという事実がある。それは、彼らがそれによって国民所得達成の大きな部分を受け持っていて、その結果この富の利用の権利も持っていることを意味する。庇護を求める人が国に満ちあふれているというテーゼは、全世界的に考察すれば——ドイツにいる約20万人の難民に直面して、非現実的状況描写である。なぜなら世界には政治的迫害、戦争、飢え、不幸と経済的欠乏から避難している1千5百万人以上の人がいるからである。「私の仕事仲間を刺激するな」同盟は正しく確認している。すなわち「われわれの憲法の『父母達』は、国家社会主義者の迫害をおそれて逃亡した経験から基本法に庇護権を規定した」。

度々聞かされ、引用されたナチのビラで細工された外国人のじゅっぱひとからげにされた犯罪化も間違いである。ニーダーザクセン刑事犯罪学研究所は1991年にニーダーザクセン警察により集計されたすべての犯罪行為の分析の中で、確かに外国人に対する警察の犯罪容疑は増加したが、告訴の際には外国人に対する犯罪容疑はドイツ人に対するよりはるかに少ないのが証明されることを確認した。その他、この研究所の報告は、集計された庇護を求めている者の暴力犯罪率(3.9パーセント)はドイツ人のそれ(7.1パーセント)よりも明確に低いことを確認した。庇護ないし外国人法にたいする外国人の違反がしばしば生じているとするなら、それはドイツ人には法的に適用されることのできない軽犯罪であろう(『フランクフルト・ルントschau』1992年9月30日)。

客観的なデータはおいといても、外国人敵視は全部共通に非道德的で、反人道主義的である。そして、その結果ドイツに深刻な経済的結果をもたらすであろう。今日の世界で、特に今日のヨーロッパでそれは無類のアナクロニズムである。

ヨーロッパ大陸は経済的に、そしてそれに従って着実に文化的にも成長して一体になっている。様々な国の人々はお互いにより親しく知り合っている。と

もに学び、研究しあるいは働いているし、お互いを理解し、そして国民的習慣を受け入れている。「世界市民」のメンタリティーは我々により近くなっている。世界的な問題を認識し、利己的でなく解決し、すべての人々が分けあわねばならないこのひとつの世界だけがあることを知っている。多文化社会が、追求する価値のある未来のヴィジョンである。ドイツのデパートのなかでアジアや南アメリカの製品を購入し、外国の学者との会議で最も新しい専門的問題について討論し、外国に旅行者として出かけたり諸外国と取引する等などのことがまさに当然であるように、様々な国家の出身者による共同生活がまったくあたりまえに成らなければならない。

人間の歴史の中では諸民族の接触が常に様々に異なった結果——すべての文化が破壊されたような——を生んだ。アメリカの発見と征服を考えるだけでもよい。しかし、他の傾向もあり、それは諸民族間の接触や交流が社会的・経済的前進を促進させたという事実である。この積極的面を諸民族の未来のために利用することが大切である。我々は他民族の経験と習慣を無視する権利を持たず、独自の発展のための機会として他の文化への接近をとらえるべきである。どんな場合でも世界の他の地域からの人々の移住が、独自の文化的自己同一化の課題に導かなければならないわけではない。その際いずれにしてもこんにち、人々の意識の中に国民文化がいかなる意味を持つのかと言う問題がたてられるべきである。なぜなら、プリント・電子メディアの発展によって世界文化の受容の可能性が一層生じているからである。多くの人々にはまだ気付かれていないのは当然であるが、それは現実には文化の接近が部分的にしる行われているということを意味する。

ドイツ民主共和国の市民は1989年秋に、彼ら固有の政治活動によって世界の全体性を把握するための新しいより良い条件を作りだした。示威運動の最も重要な要求には海外旅行の自由もあった。この観点から考察すると、1961年のベルリンの壁の建設と同様に、東側と南側にたいする西側の依然として続いている障壁は不幸をもたらす決定であろう。

ひとつの民族の歴史は世界史と関係してのみ把握されなければならなかったし、そうされねばならない。技術交流の基盤、世界の包括的な通信・供給シス



テムとそれで与えられた情報・物品交換の可能性により世界は一層近づいている。それはまた、世界的な問題がより一層個々の人々の生活に干渉し、そして地域の問題はより一層全人類の問題になっていることを意味している。まったく当然に、そのような世界で障壁がおよそ現実的であるかどうかという問いが生まれる。

科学者によって未来の世界の発展は相互に貫きあう要素の多面性のゆえに予言されることは出来ないのであるが、相異なる諸文化の発展を考慮すれば文化的習慣のしだいに強まる相互浸透の時期が来ているように思われる。それは、当然、受容、寛容、精神的柔軟さと摂取の準備を前提とする。

これらのけっして幻想的でなく、必然的で首尾一貫した発展に直面して、国家主義、外国人敵視、人種主義の歴史的根拠と結果への問いが生じる。当然ながらこれはここではただテーゼのようにだけ行われることが出来る。しかしそれにより、新たに現実的にされた問題について反省的な気持ちにさせられるべきである。

しかし、歴史的関係の知見は偏見に対抗し、人々の態度への理解を引き起こすこと、短見な反人道的提案が可能にするより問題解決を総合的に把握することに寄与する。

ローマクラブ——一種の「世界市民」として自らを理解している、傑出した科学者の国際協議会——は、1991年の「世界革命」という報告の中で、未来の世界をいかにつくるかという共同のヴィジョンの欠如が、多くの人々に勇気を失わせ、欲求不満を起こさせたことに注意をむけるよう指摘した。

未来を形成する計画の欠如を誘導し、政治的に悪用することは、あまりにもたやすい。国家、イデオロギーそして宗教は、常に繰り返し敵対者を作り出す事によって内政と外政の失敗をそらすことと、困った状態の責任を架空の敵におわせることを試みてきた。そのような敵を作り出す手段は、すべての国民をひとつの統一した目的に導くことをかなり可能にした。ローマクラブはさらに次のことを確認している。「伝統的な敵がもはやいないので、宗教上のあるいは民族的少数派という、不愉快に思うそれらの異種に責任を負わせる試みが生じている」。(全人類の) 実際の敵として位置づけられるのは次のものだ。自然

破壊、地球上の様々な地域における重要な資源の不足、飢餓そして栄養不良、読み書き出来ないことそして失業である。

その際、我々はこの問題は個人の責任ではなく、社会的環境によって、個々の人格の開花と発達のために条件によって引き越されることを考慮すべきである。様々な民族集団を一括してどこかの隅におい払う様々な解釈は、およそ人種的な性格である。そのことは民族集団の間で特有な文化的特殊性、生活習慣そしてそれらの現実化の権利がないと主張することにならない。しかし、この解釈もまたある民族の数百年の民族の歴史の結果であり、そしてしばしば歴史の中でそれぞれの民族集団が演じた役割の遺産である。疑いもなく、例えば抑圧されている少数民族は、ひとつの国家制度のなかで国内の多数民族とは異なった文化とメンタリティを発展させた。同時に国内の少数民族の抑圧は、多数民族の代表による少数民族者のひとまとまりの等級分けにほとんどいつも導き、まさにその種の抑圧的な組み込みはしばしば彼らに対する権力政治であった。

現在の世界の問題は今まで以上に全体的になったのは、まさにそうである。多くの科学者は問題の世界的波及の強まり、すなわち世界の依存関係が生まれる結果をもたらす経済の、政治の、生態系の、文化の活動の世界的広がりについて語る。現在のそしてなお生まれている問題の解決は、人類への挑戦であり、まさに最終的に我々の地球上で生命の保持が重要である。しかし、政治家も責任を自覚している専門家もひとりでこの複雑なお互いに深く関連している問題を克服できない。そのために、現代の政治の、生態系の、文化の進行にたいする諸国民の宿命論的受動的態度はふさわしくない。

ローマクラブは警告調で書いている。「ほんの少数の政治家だけが、未解決のままになっている問題の世界的性格に十分に気付いている、そしてそうではあるが、彼らはこれらの問題の相互作用についての見識をほとんど持っていない」。そこから次の事を確認している。「政治の活動は選挙期間と政党間の競争のまわりを激しくまわっているため、そうこうするうちに政党は彼らが貢献すべきである民主主義を傷つけている」。ドイツでの難民問題の討論は雄弁な例である。いかに理屈が活発に主張され、そしてにがにがしい現実があたえられることか。

当然ながら、国家社会主義の変形は特別にドイツだけの問題ではない。我々が現在、昔のソヴィエト連邦やユーゴスラヴィアにおける民族集団の間で経験しているような、対立と戦争は民族主義の先鋭化させられ、拡大された形態である。そしてそれが急速にどこへ行くのかを示している。

ヨーロッパにおいてはブルジュア国家形成の根源は、新しい社会的関係を組織して管理の下に置き、共同社会のための特別な精神を作る必要性にある。そこで国家主義は他の国民に対する偽りの奇妙な優越性の根拠を提供し、そして国家間に発展する競争をめぐる闘いの構成要素だった。結局それは権力安定化と政治支配の防衛に貢献した。この強制は、固有の優越性を明確にする事になった国家の諸特徴が作為的につくられることに導いた。諸特徴が社会の現実の中で証明されることが出来なかったにもかかわらず。この目的のために国家社会主義の弁護者たちは、自然科学研究の成果をもこの目的に応じてねじまげて用いた。

国家社会主義の精神・イデオロギーの創始者は過小評価されるべきではない。そのイデオロギーはそのときどきの国民の部分に受け入れられ、そしてまた国民操作と教化の技術が伝えられた。

破壊的な世界政治の結果をドイツ国家主義は引き起こした。ドイツにより始められた20世紀の戦争は、国家主義にとってある特別な意味があった。それは一面では覇権の要求のイデオロギー的・政治的公認と同時にそれによる住民の圧倒的多数の動員であった。ヨーロッパにおけるユダヤ人の迫害、追放と最終的には絶滅、他の諸国への襲撃そして組織的に計画されて行われた民族抹殺は、この国家主義によっておこなわれ、そのための口実が提供された。

新たな歴史の正当性の公認要求から自由でない短見な歴史の更新は、国民の愚かな行動、右翼過激派の暴力行為そして人種主義的見解を押しとどめる保障にならない。それゆえに、自分達の歴史の汚点からぬけでることを目的としてドイツ史を推敲し、論争のタブー範囲を設定することは非常に危険な冒険である。覇権と公認から自由な歴史の叙述と描写だけが、社会の民主主義的・人道主義的基本価値に貢献できる。

## む す び

数年来、「青年史・青年研究会」の会員は今世紀の青年史研究に従事してきた。今までその中心にはワイマール共和国の時代と国家社会主義の時代の青年史がおかれた。その際、青年が政治的、社会的、文化的過程に引き入れられる限り、彼らが歴史の客体であり、しかしまた主体でもあったことを示すことが重要であった。

1992年8月のロストックでの外国人に対する人種主義的暴力による襲撃ならびに続いて起った事件は、青少年の現実の状況を一層熱心に対象とすることに我々を導いた。

その際、社会的原因、しかしまた国家主義の歴史的原因と結果ならびに現代世界の関連についての無知が、現実の進行に責任があることは明確である。

「青年史・青年研究会。著述と斡旋 e. V」は、それゆえ「右翼過激主義」のテーマに関する歴史的・現実的問題の討議を深めることに貢献したい。その際に、国家社会主義と右翼過激主義の歴史についての知識をひろめ、地域的局面についての知見も伝えることが重要であるはずである。

1992年末、研究会は『20世紀前半のメッケルンブルク史研究』を出版した。その諸論文は半世紀のその地域の歴史を記録した。その本は、メッケルンブルクにおける議会制民主主義の基礎についての資料を提供し、ハーケンクロイツのもとでの日常生活と空軍と海軍の生徒兵（中等学校生徒からなる一読者）の動員について報告し、そして一節でメッケルンブルクの学校史を記録している。それは討議を深めるための基礎ともなる。

執筆者と出版者は討論の生産的な形態であるなら喜んで受け入れるつもりである。

研究会の会員が積極的にかかわった『第二次世界大戦時の青年』の出版は、同じように討論の基礎を作ることが出来る。

これから経済的条件が許す限り、研究会会員の一層の研究成果を公にすることが予定されている。研究・出版計画の財政的保障とともに、成果の読者・利

用者との結びつきと討論が大きな意味を持つ。

### 〔解説〕

ここに訳出したのは、*Rostock: August 1992, Eskalation der Gewalt-Ursachen-Konsequenzen*, Studienkreis für Jugendgeschichte und-forschng. Darstellung und Vermittlung e. V. (Hrsg) Verlag Jugend und Geschichte (『ロストック：1992年8月，暴力の拡大・原因・結果』青年史・青年研究会，著述と幹施 e. V 編，青年と歴史出版)である（ただし，参考文献の項は省略）。出版は，1993年1月である。

1992年8月末，北ドイツの港湾都市ロストック（中世にはハンブルク，リューベックとともにハンザ同盟都市であった）で若者による難民収容所襲撃事件があった。この事件はわが国のテレビ，新聞でも報道され，ナチスの復活として注目された。

この本は，ロストックの青年運動史と青年問題の研究者がこの難民襲撃事件の経過と問題の分析を試みたものである。カール・ハインツ・ヤーンケは事件の経過と問題点を，マンフレッド・ベントの報告は若者が襲撃の先頭に立ったこともあって，ネオナチと青年問題の分析を，インゴ・コッホは克服の展望を提出しようとしている。

著者の経歴を簡単だが示す。

カール・ハインツ・ヤーンケ (Karl Heinz Jahnke)：1934年生まれ。歴史学者，元ロストック大学歴史学科教授。ドイツ統一後ロストック大学を退職させられた。国家社会主義，その抵抗運動，特にそれらの青年運動史についての多数の著作がある。最近では，ミヒャエル・ブドーとの共著 *Deutsche Jugend 1933-1945* (1989, ハンブルク)，*Ein ungewöhnliches Leben: Bruno Dubber* (1990, ハンブルク) がある。

マンフレッド・ヴェント (Manfred Wendt)：1952年生まれ。歴史学者，青年史の研究者。主に戦後の農村の青年史（特にドイツ自由青年同盟の役割）を研究してきた。

インゴ・コッホ (Ingo Koch) : 1960年生まれ。「Das Verhältniss der SAJ zu Faschismus und Krieg in der Zeit von 1930 bis zur Errichtung der faschistischen Diktatur in Deutschland am 30. Januar 1933」で博士号取得。

青年と歴史出版は、「青年史・青年研究会、著述と斡旋 e. V」によって作られている。この「e. V」は、青年史と青年問題を研究し、その成果を世に問うだけでなく、会員の研究の機会を斡旋することを目的としている。その意味で、これは研究者の相互扶助組織だとも言える。そこで「著述と斡旋 e. V」(Darstellung und Vermittlung e. V) と訳した。相互扶助の性格を持っているのは、会員達が旧ドイツ民主共和国時代ロストック大学で教員、大学院生として青年運動史の研究をしていたが、統一後職を迫われたり、極めて不安定な状況になったからである。この研究会の活動は「むすび」を見てもらおうとわかる。

これらの人々と、私はロストックに滞在中知り合いになった。彼らは、ナチズムの復活を許さないことを共通の課題として青年運動史研究に取り組んでいた。統一後、彼らの多くは失職したにもかかわらず、その課題を変えていないことはこの著作でわかる。彼らの活動の様子を知る事が出来るのはうれしい。よくわからない事実があるが、訳出したのは彼らの問題意識と課題を知らせたいからでもある。こころよく訳出を許可してくれた著者たちにお礼をいいたい。

この本で、著者達は若者がネオ・ナチに引かれた原因をいくつか挙げている。そのなかで、教育学者として興味をよぶのは次の点である。自己同一化の崩壊とはどのような質なのか。すなわち、旧ドイツ民主共和国へのあるいはその時の生活への自己同一化のことなのか。あるいは、現体制のもとでのことなのか。著者達は両方を意識している。

旧ドイツ民主共和国のなかで自己同一性の崩壊 (Identitätsverlust) が起こっていたという指摘はすでにされていた〔フランク・シューマン, *Glatzen am Alex* (『アレキサンダー広場の坊主頭』) 1990, ベルリン〕。また、1980年代後半旧ドイツ民主共和国が、青少年の自己同一化に成功していなかったことは、ライプ

ヒッチにあった中央青年研究所による *Jugend und Jugendforschung in der DDR* (『ドイツ民主共和国に於ける青年と青年研究』1991, ライプツヒ) でおおやけにされたことであった。また、ベルント・シーグラール『いまなぜ、ネオナチか?』(有賀・岡田訳, 三元社, 1992) でも指摘されている。

しかし、自己同一化に成功しなかったということは、青少年の圧倒的多数がそうであったことを意味しない。前述の中央青年研究所の調査では1989年3月の時点でかろうじてであるが過半数が自己同一化を感じていた。したがって、この層には新体制になってからの自己同一化の崩壊が問題となる。

著者達は旧ドイツ民主共和国の体制にもどるべきだとは考えていない。マンフレッド・ベントは、旧体制の教育システムの欠陥が青少年の自己同一化に否定的に作用したことを指摘している。中央青年研究所の調査では、この教育システムを支持していた青少年は1989年3月の58%から1990年2月の22%に激減した。

マンフレッド・ベントが指摘している、青少年の環境の悪化と展望の喪失は、ドイツだけでなく、わが国にもそうした要素があるから関心と呼ぶ。彼が引用している、そしてその引用部分では同意しているビーレヘルト大学教授ハイトマイヤーは、シーグラールによれば欠損理論の支持者で東ドイツでも極右主義研究についてのオピニオンリーダーとなった。シーグラールによれば、ハイトマイヤーは社会の危機的状況に、個別化され、対応できない青少年が、無力感と生きる指針を喪失した結果、極右主義の土壌になっていると主張している。その限りでは、ヴェントの説明もハイトマイヤーの理論の影響をうけたと言うことになる。

しかし、問題はハイトマイヤーの理論よりも現実の青少年の意識と彼らの環境であろう。その点についてのヴェントの説明は、右翼過激派青年だけでなく青年一般の問題になっているが、統一後の彼自身の問題と重なるので叙述は共感的である。彼の青少年活動の展望の提起は、わが国の青少年活動者との討論も可能である。

著者達はハイトマイヤーのように、青少年の感情をスポーツや余暇生活で安定させることだけに解決をもとめているのではない。それは、ヤーンケやコッ

ホの主張に明かである。

ヘルマン・ラーガー、*Flächenbrand von rechts* (『右翼による火災のひろがり』1993, ロストック) ではいくつかの調査が引用されている。それらでは、青少年におけるネオナチ的心情は無視できない状況である。例えば、ライプチヒの社会分析研究所によるザクセンとザクセンアンハルト (東部ドイツにある) の青少年調査では、1990年に比べ1992年ではその心情が増加している。すなわち、「国家社会主義は良い面があった」とした者は、生徒で13%から25%へ、徒弟で20%から37%へと増加した。「ユダヤ人はドイツの災難」とした者は、徒弟で19%から29%へ増加した。また、「ドイツ人は歴史上常に一番優れている」とした者は生徒で17%から21%へ、徒弟で20%から30%へ増加した。(なお、1990年当時こうした心情が東ドイツだけの問題ではなかったことはジューグラー前掲書で指摘されている。)

インゴ・コッホが歴史の見直しと公認化要求に対し、強い危惧の念を示しているのは、ドイツにおいてナチスドイツの犯罪性を軽視したり、無視し、民族的伝統を強調する歴史研究が1980年代から活発になっているからである。その「歴史家論争」については三島憲一『戦後ドイツ』(岩波書店, 1991) を参照されたい。また、彼のドイツ人の失業率と外国人労働者の増加の関連については、手塚和彰『労働力移動の時代』(中公新書, 1990) でも指摘されている。

著者たちは、いずれも旧ドイツ民主共和国時代、その体制に批判をもちながらも自己同一化していた。彼らの多くは、統一時に国家連合体を構想していた。カール・ハインツ・ヤーンケは教授退任(1991年)にあたって、「ドイツからけっして戦争とファシズムを生み出さないことを保障する状況をドイツ民主共和国でつくるという希望はもはや存在しない」と述べ、「私はドイツ民主共和国の失敗の原因を公にすることに寄与し」その責任を負うことを明らかにしていた。したがって、ドイツ統一(それはすでに指摘したように吸収合併であった)後に彼ら自身の自己同一性の新たな確保が必要だったことが想像できる。その表現と言えるのがこの著作であると言える。

(大串隆吉)